紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る
―ダハシュール北遺跡第28次調査(2022)―

矢澤　　健　東日本国際大学エジプト考古学研究所客員教授
吉村　作治　東日本国際大学総長・教授

Investigating the Transition of Egyptian Burial Practices in the Second Millennium B.C.: The 28th Season of Dahshur North Project, 2022

YAZAWA, Ken　Visiting Professor, Institute of Egyptian Archaeology, Higashi Nippon International University
YOSHIMURA, Sakuji　President / Professor, Higashi Nippon International University

1. はじめに

古代エジプトの紀元前2千年紀に相当する中王国時代(紀元前21～前17世紀)と新王国時代(紀元前16～前11世紀)では、葬制の様々な側面で違いが見られ、この時期に古代エジプト人の死生観における重要な転換があったと推測される。発表者らは紀元前2千年紀における葬制の変化の特質とその背景を明らかにする目的で、2つの時代の墓が混在しているダハシュール北遺跡を対象に調査・研究を実施してきた。過去の調査結果から遺跡内の場所によって墓の時期や特徴が異なることが判明したため、2015年以降は調査地区を1、2年ごとに変え、遺跡の年代幅や階層差、埋葬習慣の変遷過程などの全体像を把握することに主眼が置かれた。

2022年はしかし、2019年に調査された地区の再発掘が行われた(**図1**)。この地区で2019年に発見された、本遺跡の中王国時代最大のシャフト158号墓の解釈を巡って議論があり(Yoshimura et al. 2021; Yazawa 2022)、それを一歩前進させる目的で周囲の墓が調査された。シャフト158は盗掘を受けていたが、残存していた副葬品の質は高く、石棺が用いられた痕跡が認められた。痕跡とは埋葬室の壁に掘り込まれた丸太を架けるための穴などで、石棺を搬入または搬出する際に利用されたと推測される。石棺そのものが発見されたわけではないが、石棺が墓から取り出され、他所で再利用された例が知られており、シャフト158でも同様の活動が行われていた可能性がある。こうした議論を前進させるため、両隣にある同規模の墓(シャフト159、シャフト163)の調査によって、傍証を取得することが今期調査で試みられた。

シャフト158の西隣にあるシャフト159と東隣にあるシャフト163が調査され、シャフト159は未完成であることが分かった。また2019年の調査で未発掘だったシャフト167と168の調査も同時に実施された。

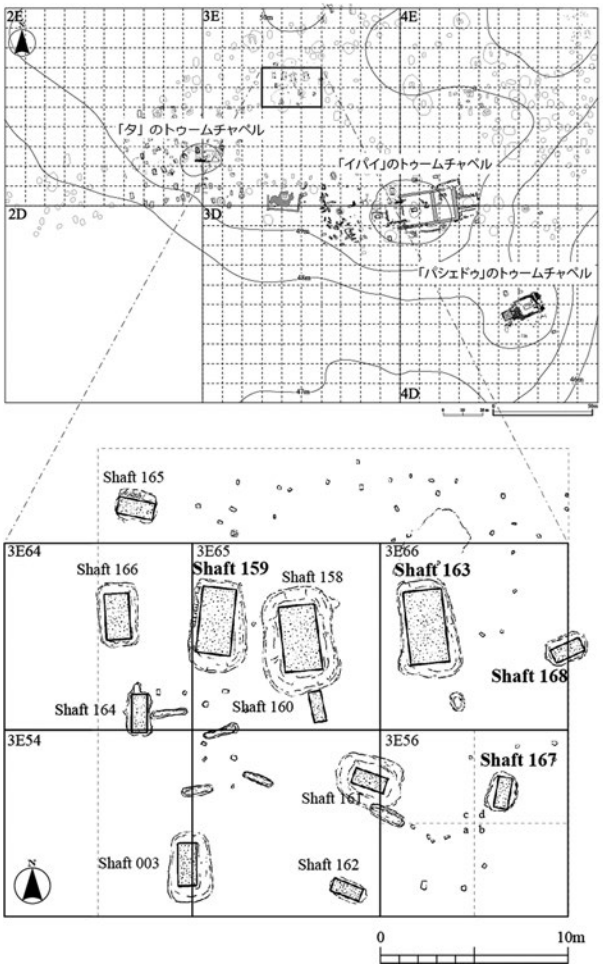

図1　ダハシュール北遺跡全体と第28次調査区

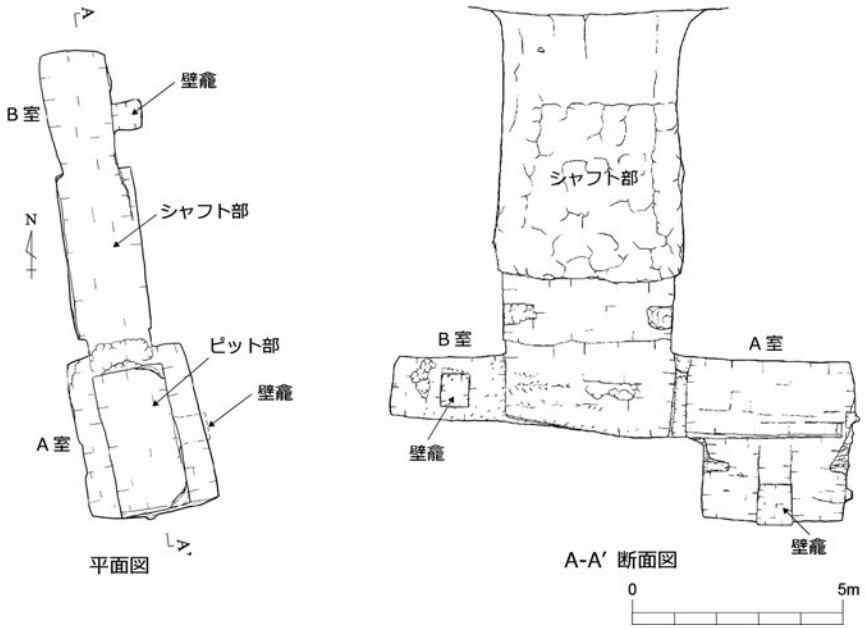

図2　シャフト163平面図・断面図

結果、シャフト167は新王国時代のシャフト墓であることが判明し、シャフト168は深さ80 cmの土壙で、埋葬の痕跡は認められなかった。以下では、シャフト163と167の調査成果について報告する。

2. シャフト163

シャフト163（**図2**）は開口部が南北3.9 m、東西1.8 mで、シャフト部の深さは10.0 m、底部から南北両側に埋葬室が設けられていた。北側の埋葬室（B室）は平面が矩形で南北2.7 m、東西1.5 m、天井高1.4 m、東壁に幅65 cm、高さ75 cm、奥行63 cmの壁龕が設けられていた。南側の埋葬室（A室）は平面がほぼ矩形で南北3.7 m、東西3.0 m、天井高1.8 mで、部屋の中央には矩形のピットが掘削されていた。ピットは南北3.4 m、東西1.7 m、深さ2.0 mで、東壁に幅80 cm、高さ95 cm、奥行75 cmの壁龕が設けられていた。北側のB室があることを除けば、概ねシャフト158と同じ規模、形状である。

シャフト部には風成の細砂が堆積しており、深さ約8 mから日乾レンガと少数の石灰岩ブロックが乱雑に散乱した堆積が発見された。この下は黒色の土層が堆積しており、その構成から元々日乾レンガだったものが崩れて固まってできた堆積物と推測された。この土層はシャフト部の北側から南側（A室）に向かって低くなるように傾斜しており、坂の下端、つまり土層の厚みが0になる部分はちょうどA室のピット北端に当たっていた。坂の上端（シャフト部北端）の高さはおよそ80 cmだった。日乾レンガによる緩やかなスロープが作り出された目的は、A室ピットへの石棺の搬入だった可能性が考えられる。

B室北東の床面には人骨がまとまって出土しており、周囲には彩色または碑文のあるプラスターの断片が散乱しており、ミイラマスクの残存物であると考えられる。B室入口側の床面からは大型の皿形土器と胴部に屈曲を持つ平底、無頸の壺形土器が発見された。

A室の西側床上には日乾レンガの壁がピットの西壁に沿うように面を合わせて築かれており、壁とA室西壁の間にはタフラ（付近の岩盤を構成する泥質の石灰岩）の塊と崩れた日乾レンガ、砂が充填されていた。壁と堆積を除去したところ、床面の直上から牛の肩甲骨、大腿骨、肋骨が発見された。その構成から、被葬者への供物として副葬されたものと考えられる。壁の用途は今の所明らかではない。

A室のピット内から、極めて保存状態の悪い箱形の木棺が発見された（**図3**）。蓋は失われており、箱部分の上部も残っていなかった。残存部分から推定される木棺の長さは約2.5 m、幅約1.0 mであり、内面は白色プラスターで覆われ、その上に供物卓の図像とコフィン・テキスト（**図4**）が書かれていた。碑文の記述から、棺の所有者の名前はプタハエムサフであることが判明した。棺の長辺の側板外側には垂直方向の4列の銘文帯が等間隔に配置され、短辺側には垂直方向の2例の銘文帯が両端に書かれていた痕跡が認められたが、極度の劣化によってその内容を明らかにすること

図３　シャフト 163A 室ピット内木棺出土状況

図４　シャフト 163A 室ピット出土木棺のコフィン・テキスト

はできなかった。東側板(長辺)北側の外面には、銘文帯の間に一対のウジャトの眼が描かれていた。これらは中王国時代の箱形木棺によく見られる特徴である。

Ａ室ピットの壁龕前から、平面が 60×60 cm の箱の下部が出土した。側板の上部は失われており、残存している高さは 10 cm に満たなかった。出土位置とサイズから見て、カノポス壺を収めるための櫃と考えられる。本来は壁龕に収められており、盗掘時に手前に引き出されたと推測される。

Ａ室ピットの北西端からは、ミイラの下半身が天地逆の状態で発見された。盗掘時に廃棄された跡と推測され、ミイラの周囲からは大量のファイアンス製ビーズが出土した。その他ピットの内部からはファイアンス製、カーネリアン製のビーズが発見された(**図5**)。

Ａ室から出土した土器の内、３点はほぼ完形に復元された(図５)。前述のＢ室から出土した土器はこれらと同形・同セットであり、この事実はＡ室とＢ室の埋葬が同じ計画の元に準備されたことを示唆する。これらの器形、特に壺形の２点は中王国時代の後半によく見られる。また、シャフト部から一対の目の象嵌(図５)が出土しており、ミイラマスクまたは人型木棺の目に嵌め込まれていたものと推測されるが、Ａ室とＢ室のどちらの埋葬に属していたものかは不明である。

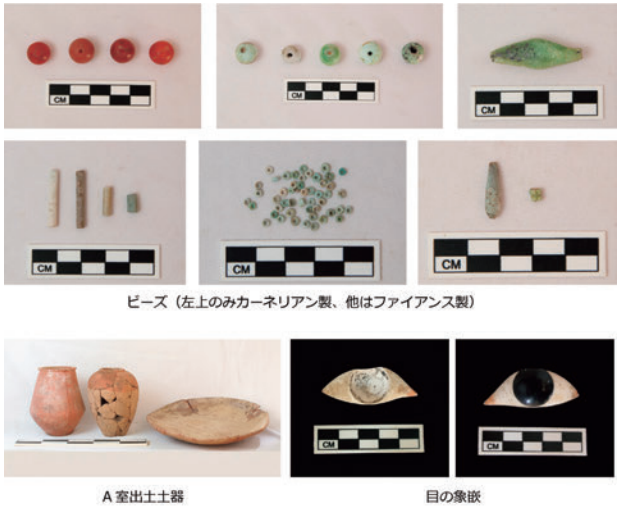

図５　シャフト 163 出土遺物

シャフト部におけるスロープの存在は石棺のような重量物の搬入または搬出が過去にあったことを示唆させるが、Ａ室ピット内部では石棺の断片は一切認められなかった。なお、隣のシャフト 158A 室の壁にあった丸太を架けるための穴は、シャフト 163 には無かった。

3. シャフト 167

シャフト 167(**図６**)は開口部が南北 0.9 m、東西 1.8 m で、シャフトの深さは 7.8 m、底部から南北両側に埋葬室が設けられていた。北側の埋葬室(Ａ室)は平面が矩形で南北 2.0 m、東西 1.5 m、天井高 1.3 m、南側の埋葬室(Ｂ室)は同様に平面が矩形で南北 3.0 m、東西 2.6 m、天井高 1.2 m であった。

Ａ室の床面からは葦のマットに包まれた子供の人骨が、頭を北に向けて横たえられていた。透かし細工でハトホルの牝牛が表現された指輪が首付近から発見された。

Ｂ室の盗掘は徹底されていたようであり、ファイアンス製の指輪や石製の耳飾りを除いてほとんど本来の形をとどめている遺物が認められなかった。ファイアンス製、ガラス製のビーズが数多く出土しており、アマルナ時代に類例が求められるものが含まれていた。土器は第 18 王朝後期から第 19 王朝に年代づけられる。

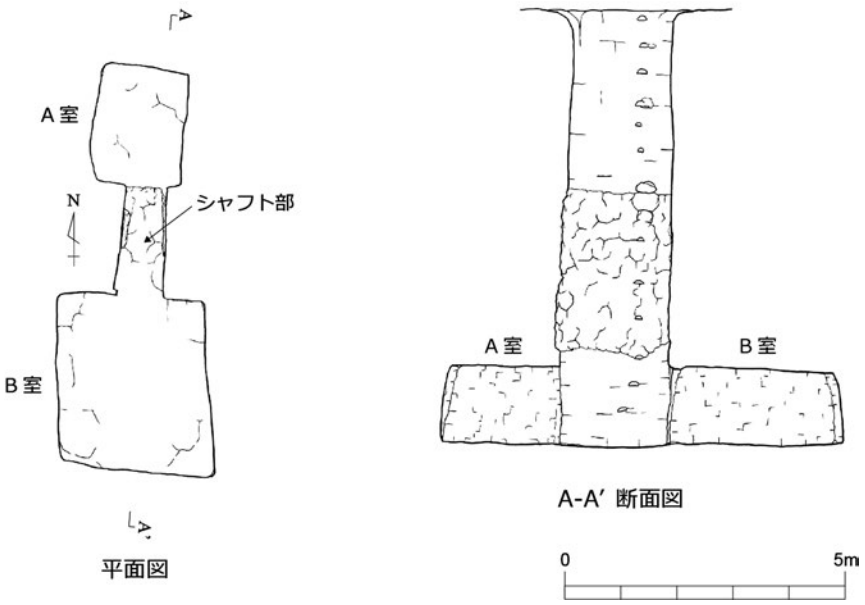

図6　シャフト167平面図・断面図

4. おわりに

シャフト163は北側にも埋葬室が造られた点を除けば、シャフト158とほぼ同じ規模、形状であることが分かった。そしてシャフト163でも、石棺は断片さえ確認されなかった。一方で、シャフト下部では日乾レンガを利用したスロープが見つかっており、これは石棺のような重量物をA室のピットへ搬入する以外に、その用途を想定し難い。スロープを石棺搬入の証拠と積極的に捉えるならば、シャフト163でも石棺が用いられ、ピット内で発見されたプタハエムサフの木棺が元々その中に入れられていたが、再利用のために石棺だけが持ち出された、というストーリーが考えられる。しかし、石棺そのものがない以上、本来ここに石棺があったとする説は確証に乏しい。シャフト158の埋葬では石棺が使用されていたとする推論を、同規模のシャフト163の発掘によって裏付けることが今期調査の目的の1つだったが、期待した成果は得られなかった。

一方で、本遺跡の中王国時代では最大級の墓の資料を今期調査で追加することができ、シャフト158とともに、本遺跡では最高位の人々の埋葬習慣の一端を知る手掛かりとなった。特筆すべきはコフィン・テキストが書かれた木棺で、本遺跡初の発見となった。

シャフト167は、平面の長軸を南北にとる新王国時代の墓であることが明らかにされた。本遺跡の新王国時代の墓は平面の長軸を東西にとるものが多数を占め、長軸が南北方向の墓は珍しく、本遺跡の中では比較的古い時期のものであることが多かった。シャフト167の副葬品の多くは持ち去られていたが、残存していた遺物はアマルナ時代以降のものが含まれており、これまでの傾向と一致する結果となった。これらの成果は、今後計画されている墓の編年研究の基礎的な資料となる。

本研究は日本学術振興会基盤研究(B)「古代エジプト新王国時代のメンフィス編年の構築とテーベとの比較研究」(研究代表者：吉村作治、課題番号21H00597)、新学術領域研究(研究領域提案型)計画研究「古代エジプトにおける都市の景観と構造」(研究代表者：近藤二郎、課題番号18H05446)と基盤研究(C)「古代エジプト中王国時代末期の王朝交替プロセスの解明」(研究代表者：矢澤健、課題番号19K01098)の助成を受けて実施された。

■参考文献

・Yazawa, K 2022 The Archaeological Context of Small Faience Items in a late Middle Kingdom Tomb in Dahshur North: Evidence for the Sealing Rite of the Burial Chamber? In N. Kawai and B. Davies (eds.), *The Star Who Appears in Thebes: Studies in Honour of Jiro Kondo*, 533-542, New Brighton, Abercromby Press.
・Yoshimura, S., K. Yazawa, H. Kashiwagi, K. Takahashi, Y. Yoneyama, S. Yamazaki, N. Ishizaki and M. Arimura 2021 A Brief Report of the Excavation at Dahshur North: Twenty-Sixth Season, 2019, *The Journal of SHOUHEI Egyptian Archaeological Association* 9: 17-44.
・矢澤　健・吉村作治　2021「紀元前2千年紀エジプトの葬制の変遷を探る―ダハシュール北遺跡第27次調査(2020)―」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』109-114頁　日本西アジア考古学会。